世界の茶の文化セミナー

―「受講ノート」（文責：市民活動団体“堺なんや衆”理事　前田秀一）―

堺発信「茶（CHA）の心と文化」

前堺市博物館館長・堺市教育委員会顧問・和歌山大学名誉教授
経済学博士　角山　榮

はじめに

日本の食堂では、中に入ると「いらっしゃい！」と言って、まず、お茶を出してくれる。この注文もしないのに、無料で出されるこの「お茶」は何なのか？ましてや、一般の家庭でも、来客があるとしかりである。例え水といえども、外国ではこのような習慣はない。つまり、外国ではすべてが商品化されているので、このように注文もしないものを無料で差し出されることはない。

これは 16 世紀に堺で千利休により大成された「抹茶」文化（「茶の湯の」文化）が、18 世紀に「煎茶」に引き継がれ、明治・大正のころには、一般家庭に「番茶」として庶民の生活に定着していった日本独特の「文化」である。

Ⅰ．茶についての独自の文化を創造した日本人

1．茶が中国から渡来したとき、茶は何であったのか？

中国の唐の時代（7～10 世紀）には、固形茶を薬研とか臼（うす）で引いてお湯の中で煮だして飲用するのが主流であった。宋の時代（10～13 世紀）には、独特の抹茶の時代でその文化が日本に伝わってきた。16 世紀、明の時代（14～17 世紀）には筒状の茶碗の中に茶葉を入れ熱いお湯を注いで飲む煎茶が主流となった。

日本では、奈良時代（8 世紀）から平安時代（8～12 世紀）にかけて空海や行基らが唐に留学した際に薬用として茶の種を持ち帰ったと伝えられているが、茶の伝来がより鮮明になったのは、1191 年、宋に留学した日本の臨済宗の開祖・栄西（ようさい）が臨済禅とともにお茶の種を持ち帰り、佐賀県の背振山、平戸の千光寺に植えたのが茶の源流とされている。

1211 年、栄西は、著作『喫茶養生記』で「茶は養生の仙薬なり、延齢の妙術なり、山谷にこれを生ずれば其の地神霊なり、人倫これを採らば其の人長命なり」と表した。

2．16 世紀、アジアへ渡来した西洋人からみた中国と日本の茶、その相違点

オランダの探検家で地理学者であったリンスホーテンは、『東方案内記』（1596 年）にインドに赴いた時の見聞記を記し、その中で「ヤパン島」（日本）と言う一章を設け「彼らは食後に、ある種の飲み物を飲用する。・・・・・このチャと称する薬草の、ある種の粉で調味した熱湯・・」と言う記述がある。

ザビエルとほぼ同世代のドミニコ会のポルトガル人宣教師であるガスパール・ダ・クルスは、著書『中国誌』（1569～1570 年）の中で飲茶について「きちんとした人物の邸を訪ねる者に対しては、陶器にチャ（茶）と呼ばれる生ぬるい湯を淹れて出すのが彼らの習慣である」と表している。

16 世紀に来日した西洋人は、日本の茶の湯に注目し、彼らには、「茶」と言う飲み物が、奇妙な遊戯に見え、抹茶と茶の道具の高価な価値評価か理解しがたく、どうして一杯の茶のために、わざわざ小屋（hut＝茶室）を建てねばならないのかと言う率直な疑問があった。

Ⅱ．茶の湯の本質解明に生涯を捧げた一人の来日西洋人“ジョアン・ロドリゲス”

1．ロドリゲスとはどんな人物か

ポルトガル人・ロドリゲス（1561～1633 年）は、イエズス会士として来日し、日本語の通事（通訳）として活躍していたが 1610 年長崎にてポルトガル船と幕府の紛争に巻き込まれて徳川家康に追放され、その後、中国で布教活動を続ける中で『日本教会史』原書全 3 巻　邦訳 2 巻（岩波「大航海時代叢書」）を著した。

従来、「茶の湯」の研究は、茶の道具、茶室の構造および芭蕉の風雅論など隠者の文化として“わび”、“さび”の美学および精神性に重点を置かれていたので、本書『日本教会史』については殆ど研究されていなかった。

そうした中、堺の賑わいの中にあって隠者の一人楽しむ茶を「市中の山居」と称したロドリゲスの著書『日本教会史』が引用され有名になった。

しかし、果たして、ロドリゲスは「茶の湯」の本質を隠者の文化の一形態としてとらえていたのだろうか？本書第 1 巻の目次（添付資料参照）を見ると、西洋人にとって、日本人が年中ひんぱんに知人を訪ね、贈り物をやり取りし、食事のふるまい（宴）をしているのがまことに奇妙な風俗に見えたと書いていることが分かった。むしろ、茶の文化の特徴を日本人の社交性に見出しているということが分かった。

2．その宴の席へお茶がどのようなかたちで入ってきたのか

「茶の湯」の謎を解くカギは、ふるまいの風俗・習慣の中で茶の出現とその位置づけと意味を探るところにある。

ロドリゲスは『日本教会史』の中で「茶の湯」について以下のように結論付けている。

① 茶は宴のふるまいの中で、最後の締めくくりとしての役割をもって出現したこと（15 世紀中頃？）

② 茶が宴のふるまいから分離・独立して、小さな狭い茶室において独自のもてなしの役割を与えられた。

③ 客に対するふるまいが、単なる飲食の提供ではなく、茶室が内と外を含め、ふれあいともてなしの装置として設定され、狭い茶室空間の中で、主客の間の距離が殆どなくなることによって face to face の関係がいっそう緊密になった。

例、床の間の掛け軸、花入と生花、置物や茶碗など茶の道具の芸術性、美学の重視

④ 茶室という聖なる空間における安全性、安心と安全の保証

例、刀の持ち込み不可、にじり口が入り口、お客の前で主人による点茶、廻し飲み

Ⅲ．茶（CHA）の文化の形成は利休の創造

1．ロドリゲスの東西文化比較論

西洋キリスト教文明では、人は一神教としてオールマイティーの神（絶対神）への帰依を誓うが、日本では「一期一会」、「和敬清寂」および「一座建立」（連歌、連句、茶会を一座、一会という）など人間関係主義を重要視し「もてなしの文化」という日本人の独創的な価値観を日常生活の中で大事にしている。

2．千利休が創造した茶の哲学と倫理は、利休の亡きあとどうなったか？

（1）古田織部、小堀遠州、片桐石州など大名茶が武士階級の間で主流となる。

（2）17 世紀末から 18 世紀には、中国人・隠元、日本人・高遊外売茶翁から始まった煎茶（道が、文人（知識人）、町人の間で拡がり、文人趣味の時代を迎える。しかし、茶は引き続き、もてなしの道具として利用された。

3. 茶のもてなしの心は、抹茶、煎茶においても、また番茶においても定着

茶（CHA）の心は、「ふれあい」C：（Communication）と「もてなし」 H：（Hospitality）の心を通して「人間関係を形成する」 A：（Associate）本来的な意義があり、その心は、抹茶、煎茶においても、また番茶においても変わることではなく定着している。

Ⅳ. 茶と茶（CHA）の心はヨーロッパへ拡大し、ヨーロッパ人のライフスタイルを変えた

1. 日本茶は、日本文化の輸出第 1 号

16～17 世紀、日本へ来たポルトガル人宣教師をはじめ西洋人は、堺において茶を発見し、茶の文化の魅力に取りつかれた。

1609 年、平戸から出帆のオランダ船は、日本茶を積み、途中バンテンで積んだ中国茶と共に 1610 年アムステルダムに着いた。17 世紀の中頃以降、茶（tea）はイギリスで国民的飲料として定着した。

2. 茶はイギリス人のライフスタイルを根本的に変革した

（Ⅰ）紅茶帝国主義

17 世紀、イギリスやオランダの子孫たちからなるアメリカ植民地移住民の飲む茶の値段は非常に高く、民衆への普及は妨げられていた。しかし、18 世紀になると値段も下がり、民衆の生活水準も向上し喫茶は異常な流行をはじめた。1773 年、イギリスの植民地・東インドシナ会社からの茶の輸入をめぐって現地人との間で「ボストン・ティーパーティー事件（ボストン茶一揆）」と称する暴動がおこり、結果としてこれがアメリカの独立の契機となった。

一方、イギリスでは喫茶の風習が上流階級の間で広がり、茶、陶磁器、絹を大量に清から輸入していた。逆に、イギリスから清へ輸出されるものは、時計や望遠鏡のような富裕層向けの物品はあったものの、大量に輸出可能な製品が存在せず、イギリスの大幅な輸入超過（1810 年－1820 年には 2600 万ドルの対清貿易赤字）であった。イギリスはアメリカ独立戦争の戦費調達や産業革命による資本蓄積のため、銀の国外流出を抑制する政策をとった。そのためイギリスは植民地のインドで栽培したアヘンを清に密輸出する事で超過分を相殺し、三角貿易を整えることとなった。清では、既に 1796 年（嘉慶元年）にアヘンの輸入を禁止していため、1839 年、貿易拒否の返答を口実にイギリスは戦火を開き、清国船団を壊滅させアヘン戦争が勃発した。

（2）茶がとりもつ家庭だんらんのライフスタイル

中国から輸入されたお茶は、日本からもたらされた「もてなし」や「ふれあい」の精神と合わされてヴィクトリア王朝時代のイギリスのライフスタイルは大きく変えた。

上流階級では、家庭における女性のティー（tea）が中心となり、家族が団欒して食べる食事としてブレック・ファーストと言う豪華な食事が成立してきた。さらに、午後には親しい友人たちとともにティーを囲んで楽しむアフターヌーンティーなど tea は家庭における女性の飲み物として、tea party として定着し人間関係の形成に大きな役割を果たした。

Ｖ．現代社会における「効率主義」対「人間関係主義（CHA の心）」

昭和 40 年代中頃以降、家庭から茶の間が消えた。自然の恵みを享受することを基本システムとした農耕社会から、できるだけ多くのものを人工的に生産する工業化社会システムに移り変わっていくにつれ、人の「和」を大事にする倫理感から「個」の価値観を優先する社会システムに変化していった。

その結果、人間関係が希薄になり、職場、地域、家庭において人間関係につまずいたことが原因とも言える予想もしない事件が相次ぎ、家庭の崩壊とも言える痛ましい事件が多くなっている。つまり、アメリカ的効率主義が現代にいたって限界となり不幸な社会的現象となって顕在化してきた。

むすび

今、国内外を問わず、再び人のつながり（Sociability）を築きなおすべき時にある。

身近にある「茶」という本来的な日本の生活文化が、「茶の湯」として「一期一会」（＊1）および「和敬清寂」（＊2）という世界の平和に通じる哲学としてここ堺の地で大成された。この精神を心に留め世界の人々と共有して、日常的な暮らしの中における人間関係の形成のあり方を深く省み、「ふれあい」Communication と「もてなし」Hospitality の心をもって「人間関係を形成」Associate 再構築するために「茶（CHA）の心」の実践を提唱している。

＊1：「一期一会」

茶会を一生に一度の出会いの場ととらえ、相手に誠意を尽くす心

＊2：「和敬清寂」

お互いに心を開いて仲良く、敬いあい、心を清らかにして、どんな時にも動じない心

角山　榮氏　プロフィル

1921 年　大阪生まれ　経済学博士　和歌山大学名誉教授。前堺市博物館館長。現堺市教育委員会顧問

1945 年　京都帝国大学経済学部卒業　和歌山大学経済学部教授、同大学学長

研究分野：専攻は経済史（特にイギリス近代経済史）、お茶や時計といったモノの生活史、社会史の研究を通じ経済史研究に新しい分野を開拓。

著作『アジアルネサンス』（PHP研究所）、『茶の世界史』（中公新書）、『時間革命』（新書館）、『堺　海の都市文明』（PHP 研究所）、『茶ともてなしの文化』（NTT出版）ほか多数。

以上